麗和 サッカークラブニュース

VOL.23

平成20年12月10日発行　発行人　麗和サッカークラブ会長　星 野 隆 之

「勢い！」

会長　星野隆之

ぐったりするほど暑かったあの夏が懐かしいような、寒さ到来の季節になってきました。皆様方におかれましては益々ご多忙のこととご推察申し上げます。

「浦和4校交流戦」、「埼玉サッカー100周年記念、さいたま市主催浦和4校対抗OB戦」、「犬飼基昭氏日本サッカー協会会長就任を祝う会」と、この4ヶ月で三つの大きな事業が行われました。

「浦和4校交流戦」ではオーバー35歳チームが新メンバーを迎えて優勝！
オーバー50歳も第3位と大健闘です。

「浦和4校OB対抗戦」では最後まで優勝を争いましたが、結果4位、残念！

「犬飼基昭氏日本サッカー協会会長就任を祝う会」は80名を超える参加者で盛大に行うことができました。遠くは神戸から、仙台から、このために来てくれた先輩、後輩もいます。会長就任に対してのお祝いの気持ち、同じグラウンドでボールを蹴った仲間としての誇り、そして大きな期待。今は、それぞれサッカーへの携わり方は違っても「頑張れ　犬飼！」の心は一つだな、と感激した次第です。

卒業生チームの「FCれいわ」が県リーグに昇格しました。OB会の勢いを感じさせる4ヶ月でした。この勢いを現役まで届けましょう。年会費も勢い良くお願いします。

次は「初蹴り新年会」と「4校対抗若手編」です。多数の皆さんの参加を期待します。

高1回の菅野一郎さんから「埼玉サッカー100年」に関して投稿いただきました。貴重なご意見をじっくりお読みいただきたいと思います。

初蹴り新年会　ご案内

1　日　時　　平成21年　1月　4日（日）
　　12:00　集合
　　12:30　～　14:00　現役　VS　FCれいわ・若手OB
　　OB紅白戦
　　14:00　～　16:00　新年会
2　会　場　　グラウンド
　　麗和会館
3　雨天時　「現役　VS　FCれいわ」のゲーム後　直ちに新年会
4　会　費　　社会人　2000円
5　連絡先　　持田正義（高16回）　宗久信男（高26回）
　　岡部正樹（高42回）

「４校対抗戦若手編」　　U―35歳　集合！

1　日　　時　　平成21年　3月　8日（日）
2　会　　場　　浦高グラウンド
3　集　　合　　8:00
4　　試合方式　　各校、オーバー24歳とそれ以下で、
　　A・B　2チームにわけ
　　30分ゲームのリーグ戦
　　※　年齢の区分は当日の4校の状況により変更あり
5　試合開始　　9:00～　　12試合連続
※　軽食を用意いたします。
※　ユニフォームは、一式用意いたします。

住所変更・会員消息・連絡等は
下記アドレスへお願いします。

連絡先アドレス　　星 野 隆 之
takayuki40402002@yahoo.co.jp

4校対抗戦2008

8回目を迎えたこの浦和4校対抗戦は，今回浦和南（旧浦和市立南）高校サッカー部OB会の幹事のもと，10月26日（日）に浦和駒場競技場サブグラウンド（ロングパイル人工芝）にて試合が開催されました。

当日試合会場は,主管校として気合の入る南高校のOBに圧倒されるような雰囲気がありました。我が高校の参加者は21名で，高25回の深谷 徹さんや今年35歳になり参加資格を得た高44回の3人（中村・鈴木・古口）が初参加しました。

9時30分に開始されたO-50（50歳以上）の初戦の相手は南高校でした。主管で気合の入る相手に再三押し込まれながら，何とか凌ぎ，長島さん（高21）の鮮やかなミドルシュートで先制！その後，同点に追いつかれながら，残り数分のところでまたもや長島さんが角度のないところから決勝ゴールをあげて，そのまま逃げ切り勝ちました。U-50（50歳以下）の初戦の相手も同じく南高校でした。先輩たちの分もと気合の入る相手と一進一退の攻防の中，駒崎さん（高37）が相手DFラインの裏に抜け出しそのまま相手を振り切って値千金の決勝ゴールを決めました。大会8回目にして初の両チーム決勝進出となり，ベンチも大いに盛り上がってきました。

決勝の相手はどちらも市立浦和（旧浦和市立）高校。O-50は豪快なミドルシュートを決められ，残念ながら0-1で惜敗し，2位。U-50は先制されるも，中村（高44）のシュートを相手GKがはじいたところを鈴木（高44）が押し込み同点のまま終了。PK合戦では，現役時代フィールドプレーヤーだった古口（高44）がGKとして奮闘するも，7-7で時間切れ両校優勝となりました。

試合後の懇親会は北浦和の「ダイゴウ」に場所を移し，我が高校の参加者は9名でした。途中で行われた成績発表では，両校同時とはいえ我が高校の初優勝（U-50）が報告されると会場全体が盛り上がり，星野会長の号令の下優勝カップで回し飲みをしてさらに盛り上がりました。

今回の大会でも，永井良和さん（南高：会長）のハーフボレーでのゴールなどもあり，　他校の往年の名選手たちのプレーを見ることができ，大いに楽しめました。浦高からも更なる参加者が出て，一層盛り上がると良いと感じました。

文責　中禮（高42）

「再び4校対抗戦」“埼玉サッカーフェスタ”

「浦高！　1点取れば優勝だっ！」 星野会長のゲキがとんだあたりから、どういう訳か相手南高校チームの動きが良くなり、立て続けに2点取られて負けた。

埼玉サッカー100周年記念事業のイベントとして「埼玉サッカーフェスタ」が、11月15日（土）、駒場スタジアムで開催され、「浦和4校対抗ＯＢ戦」と同じ4チームが参加した。（45歳以上、1試合20分総当たり、交代自由）

結果は1位　南高（2勝1分け）　2位　西高（3分け　　3位　市高（2分け1敗）　　4位　浦高（2分け1敗）（3,4位は得失点差）

浦高の参加者は22名。長島先生（高21回）は先月の4校対抗戦では2点を奪う活躍を見せたが、この日は教え子の浦和一女生のスタンドからの声援に緊張したのか、やや精彩を欠き、無得点に終わった。とても喜寿には思えない元気なプレーを見せてくれた菅野先輩（高1回）は、埼玉サッカー100周年について「埼玉師範（現在の埼玉大学教育学部）から埼玉のサッカーが始まったのは確かだが、旧制浦和中（浦高の前身）がその後の埼玉サッカーの隆盛の基礎を築いた役割は非常に大きい。埼師対浦中の長い戦いの歴史も含めて、もっと注目されても良いのではないか。」と、熱く語ってくれた。（別項参照）

当日は好天に恵まれ、大スクリーンにプレーが映し出されて気分はJリーガー。楽しい半日だった。

「浦和4校対抗ＯＢ戦」も来年で9年目（3校対抗を含む）を迎え、
各校とも年を追うごとに気合が入ってきた。市高などは優勝できなかった年は、
試合が終わった後グラウンドを走らされたそうだ。
次回は浦高が当番校なので、ＯＢ各位の奮っての参加をお願いしたい！
（負けてもグランドを走ることはないからご心配無く）

副会長（高16回）　持田正義

高校選手権二次予選を終えて

サッカー部監督

松村道彦(高27回)

去る10月に、高校選手権埼玉県二次予選が開催されました。一次予選突破の24校にインターハイ予選のベスト8を加え、計32校で8ブロック4校のリーグ戦が行われました。本校は成徳深谷・西武台・大宮南と対戦しました。初戦の成徳深谷戦、大会直前にレギュラーメンバーに怪我人がでたため、不安と「負けられない」という意識が強すぎ、持ち味であるボールポゼッションができませんでした。失点する可能性はありませんでしたが、得点するチャンスメイクがなかなかできないまま0:0で終了しました。次戦がシード校の西武台との対戦だったため、どうしても勝たなくてはならない試合でした。西武台戦は怪我人も何とか復帰し、ベストのメンバーで臨むことができました。5月の練習試合では3:2で勝っているのですが、あくまで「チャレンジャー」という姿勢で試合に入りました。この試合は今年度のチームでのベストゲームとも言える内容でした。特に後半は人とボールがよく動き何度か決定機を作り出しました。しかし結果はまたもや0:0。第3戦の大宮南戦は、勝てば2位でトーナメント進出が決まるという状況での試合でした。しかし開始早々にこちらが決定機を逃した直後に失点し、逆転しなければならない展開となりました。全力で戦った西武台戦の翌日の試合のためか、やや動きが重く1点の遠い試合でした。後半も押し込みましたが得点できず、終了直前のロスタイムでやっと得点しそこで終了しました。3戦3分けでリーグ3位という結果で最後の大会が終わりました。今年度のチームは6月のインターハイ予選の埼玉栄高校戦以降、夏の練習試合、男子校リーグなど1試合も負けることなくここまできました。それだけにたいへん残念な結果で、私自身責任を感じているところであります。応援してくださったOBの方々にも何とかベスト8以上の姿をお見せしたかったのですが、このような結果に終わり申し訳なく感じております。

すでに新チームは1年生30名、2年生33名、計63名でスターとしております。選手権予選で出場した2年生が例年になく多い学年なので、この冬に大いに鍛え真の実力あるチームを目指したいと考えます。今後もご支援、ご指導をよろしくお願いいたします。

南部支部新人大会

12月21日(日)12:00　浦和南G
浦和VS岩槻、上尾南勝者
12月23日(火)12:00　大宮南G
12月25日(木)10:00　浦和西G
決勝
1月11日(日)10:00　浦和南G

新主将となって

浦和高校サッカー部
主将2年　杉谷俊洋

浦和高校サッカー部主将を務める杉谷俊洋です。

今年は選手権2次予選3戦3分けの結果で敗戦することなく3年生は引退し、10月下旬から新チームがスタートしました。まだ新チームでの日数は浅いですが、80分間走りぬくために走り込み、主導権を握った試合をできるよう厳しいプレッシャーの中でのプレーを意識して日々の練習に取り組んでいます。

新チームになり、あまり試合をこなしていない中で、すでに新人戦の南部支部大会が始まりました。試合をこなしながら、個人・チームが共に成長していき、南部支部突破を目指していきます。まずは目の前の大会にチーム一丸となって挑み、来年のインターハイ予選、選手権につながるようなサッカーをしていきたいです。

現段階では県のトップレベルで戦う力はないと思いますが、来年に向けて個人の力、チームの力、共にレベルアップしていかなければいけません。そのために、ひとりひとりが浦和高校サッカー部員としての自覚をもち、自分を見つめ直し、自らの得意、不得意を理解した上で練習・試合に向上心をもって取り組んでいきたいです。試合に勝つためには厳しさも必要なので部員同士で自分の意見を正面からぶつけ合えるチームでなければなりません。そうしたチームの方向性を明確にし、部員を導くのがキャプテンの役割だと考えます。

2年生は上の学年で試合に出場していたメンバーも多く、厳しい試合も経験してきたので、その経験を生かしながら私たちの代の特徴を生かしたサッカーをし、応援してくださる方々の期待にこたえられるように努力していきます。よろしくお願いします。

特別寄稿

埼玉・浦和サッカーの躍進の源流）
（激闘―鹿島台決戦）

高1回　菅　野　一　郎

年末を控えた浦和駅西口のロータリーには、「サッカーの街・浦和」を明示する電飾が施されており、伊勢丹百貨店の巨大なショーウインドには、Jリーグ・浦和レッズのメンバー写真が飾られている。

この「サッカーの街・浦和」という言葉を生みだした論拠としては旧埼玉師範学校蹴球部が、戦前における「全国中学校蹴球選手権大会」において本県初の全国制覇を果たす偉業を成し遂げたこと、師範学校という教員養成の学校なるが故に、その卒業生たちが県下各地の学校（主として小学校）に赴任していき、そこでの児童生徒に対してサッカーの指導や普及に努めたことが埼玉サッカーの基礎を築き、その後の興隆、発展に寄与することになったというものであり、それが広く県内外の定説となっていったようである。

確かに、旧師範学校の全国優勝は、埼玉サッカーの球史に残る偉業の一つであるし、旧埼玉師範学校蹴球部OBの先生方に指導を受けた児童生徒が、旧制中学や戦後発足した新制中学校・新制高等学校のサッカー部員として活躍したことも事実である。

今更説明するまでもなく、昭和27年に新制浦和高等学校が「第30回・全国高等学校選手権大会」で全国制覇を果たし、次いで第33回～第34回と連覇したのを皮切りに、当時生まれた「埼玉を制する者は全国を制する」といった言葉通りに、「打倒浦高！」の執念に燃える浦和西高、浦和市立高、さらには浦和市立南高の各校が全国優勝を果たしたことは、我が国の一地方都市にすぎない浦和の市内4校が25年間に11回の優勝を成し遂げるという快挙を演じたことになり、「浦和の黄金時代」を築き上げたのであった。更には第60回大会において私立武南高校が全国制覇を果たすに及んで、埼玉県勢は30年間に実に12回の全国制覇という金字塔を打ち立てたのであった。

また、高校サッカーのみならず、小学校・中学校の全国優勝もあるうえに、埼玉教員、浦和クラブといった社会人の部門でも好成績を上げるに及んで、「サッカー王国・埼玉」という呼称までが生まれるにいたったのであった。

以上に述べたような埼玉サッカーの球史に輝く成果は、本県サッカーの源泉とされる旧埼玉師範学校が果たした役割と功績によるものであるとする定説に対しては、無論のことそれを否定するものではないが、定説の論拠には些かの視点の狭さに起因する欠落している部分があると感じられてならないのである。

その欠落している部分というのは、埼玉の高校サッカー躍進の魁となった母校県立浦和高校の前身である旧制浦和中学校蹴球部の先輩諸兄が蓄積してきた血と汗と涙の球史であって、鹿島台に始まり領家の地に移蓄された「遺産」ともいうべき「伝統の力」が後輩たちに受け継がれ、その精進努力がやがて華開き、戦後における栄冠獲得につながっていったと確信するのである。

旧制浦和中学校蹴球部の先輩諸兄の存在は、戦後まもなくの頃に部活動を再開した私どもを指導するために訪れていたその姿に接して、「伝統の力」というものを感じてはいたが、1992年（平成4年）に発刊された部史「麗和」の編纂に携わった際に、戦前～戦中における先輩諸兄の活動実績をつぶさに見聞する機会を得て、益々、その感を深くしたのであった。

それは、埼玉師範学校と旧制浦和中学校が県の覇権をかけての激闘・死闘を演じ続けてきた経緯があるからであって、以下にその状況の一端について付言しておきたい。

古来、師範学校と旧制中学校との間には、中学校同士とは別種の対抗意識が存在していたようで、このことは、夏目漱石の名作「坊っちゃん」の舞台となっている松山の師範学校と中学校の生徒が、教師を巻き込んでぶつかり合う模様が漱石の軽妙な筆致で描写されていて興味深い。これと同じく、戦前～戦中において旧制中学校蹴球部の雄として君臨していた神戸一中学校が、御影師範学校という初回から6連覇を達成している強豪と熾烈な戦いを演じていたようで、神戸第一中学校の部室の壁面には、部員の熱い思いを凝縮したような「怨敵、御影を破れ！」という檄文が書かれていたと聞く。旧制浦和中学校蹴球部の先輩諸兄が抱いていたと思われる「打倒、埼師！」という思いも神戸一中と同様のものであったろうし、現在の国道17号線を挟んで対峙するかのような位置関係にあった両校イレブンが試合に際しての闘争心には並々ならぬものがあったであろうし、その試合内容は表記した副題の通り、まさに「鹿島台決戦」と評してよいものであったろう。

当時を語る先輩の言によれば、学校制度の相違から、師範学校の生徒は旧制中学校の生徒よりも2歳の年齢差があったそうで、そのことから身体能力に劣る浦中としては、埼玉師範のプレースタイルが今や古典的となったキック・アンド・ラッシュ戦法に近いそれに対して小軀を逆利用しての巧みなドリブルワークとショートパスを織り交ぜての戦法で対抗していたとのことであった。中学1・2年生でレギュラーとして出場していたI先輩などは「まるで子供と大人の試合でどうにもならなかった」と述懐していたものである。

両校の対抗意識はイレブンのみならず在校生の応援にも現われていたようで、タッチライン沿いにぎりぎりまで詰めかけた応援団の声援は凄まじく、応援旗がタッチライン沿いを走るウイングプレイヤーの足を払う事態までが発生する始末であったという。
埼玉サッカーの球史に特筆される名勝負は数々のものがあったであろうが、「鹿島台決戦」は当時の浦和を舞台とした一大イベントであったのであろう。
埼玉のサッカーが創世から百周年を迎えたのを機に、埼玉サッカーの興隆発展の礎を築いたのは「旧埼玉師範学校」であるという定説に対して、そこには些かの欠落した部分が隠されているとする主張を提示してみた。
それは私自身が旧浦和市内小学校在学時に、埼玉師範学校出身の先生方と日毎、楽しくボールけりに励んだ日々があり、それが、その後の選手生活から現在の高齢者サッカーという予想もしなかった長いサッカーとの関わりに至ったことに対して、尽きることのない感謝の念を抱きつつ母校県立浦和高等学校の前身である旧制浦和中学校に入学し、浦中蹴球部・浦高サッカー部の両者での部活動を過ごしてきたものとしては、浦中蹴球部の先輩諸兄が保持する誇りと名誉にかけて、先輩諸兄が後輩たちに残された「遺産」、それは「伝統」という言葉に置き換えられると思うが、埼玉師範に勝るとも劣ることなく、むしろそれを凌駕しているといっても過言ではないと思われるその活動実績は、埼玉サッカーを語る上で、決して忘れてはならない事実であると確信するからである。
先輩諸兄は全国制覇を果たすことは無かったし、教師となって県下の児童生徒に指導と普及に努めることも無かったとはいえ、埼玉師範学校が果たした役割と功績とは異なる形で、それらを十分過ぎるまでに果たしたと言えるのではないか。
埼玉サッカーの百年の球史は、その源流と称される旧埼玉師範学校と至近の距離にありながら、それとは別の水脈より湧出した源泉としての旧制浦和中学校が、二つの源流となって競い合いながら流れ下り、半世紀に及ぶ歳月を経て、「サッカー王国・埼玉」という大河になっていった時代を含む、他府県に誇るに足りる一世紀であったと思うのであるが、私が主張する論旨は、あまりにも我田引水との謗りを免れない、身贔屓に過ぎるものであろうか。
今や王国という名の大河は、涸れた大河へと変貌している感があるが、折しも「全国高等学校サッカー選手権大会」出場への県代表が決定した時期であり、古豪復活の文字が新春の紙面を飾る日が到来することを願って止まない。浦和レッズの勝利にのみ歓喜するだけでは、「サッカーの街・浦和」、「サッカー王国・埼玉」という呼称が色褪せて見えてならないのである。

県リーグ昇格に際して

空白の時期を経て、浦和サッカーリーグ4部再加盟から始まったFCれいわの挑戦ですが、6年目でようやく県リーグに復帰することが出来ました。浦和リーグ2部昇格に際しての2度の足踏み。そして昨年は南部ブロック大会でのPK負けと厳しい結果を突きつけられましたが、ようやく県リーグへの切符を手に入れることが出来ました。長く、つらい道のりでしたが、悲願の県リーグ昇格を非常にうれしく思います。
時間はかかりましたが、これで現役サッカー部員のチーム引退後、卒業後のサッカーを行う環境として、1つの受け皿となれるかと思います。
今年度のチームは主将の田中（高58回）の代を中心に、高55回、高52回の代が数多く参加し、ここ数年はほぼ同じようなメンバーであったため連携もよく、チームとしてまとまっていたと思います。さらに、毎年何人か新戦力が加入し、チーム力がかなり向上しました。ここ6年で最強のチームになったと思います。（現役チームの練習試合の相手も務められるチームです）浦高サッカー部卒らしい集中力の高いディフェンスからの速攻を中心に堅実なサッカーで勝ち進むことが出来ました。来シーズン以降もこの姿勢を継続しながら県リーグでも戦っていきたいと思います。
FCれいわは、毎週水曜日の21：00から浦和高校のグランドを借りて練習をしています。麗和会のみなさんも気軽に顔を出していただき、サッカーを楽しんでください。卒業以来体を動かしていない人も、サークルに飽きた人も、就職以来体を動かす環境にない人もふるって参加してください。そのなかで、体の奥底に眠っていた闘争心が蘇ってきた方は来期以降県リーグでFCれいわの一員として戦いましょう。

高55回　堀　達也　（FCれいわ）

FCれいわは、来年度より県3部リーグに昇格することが決定いたしました。
今シーズンは浦和1部のリーグを9勝1分1敗で、全体の1位という成績で終えることができました。県3部リーグへの昇格をかけた南部ブロック大会も厳しい試合が続きましたが、1試合1試合接戦を制し、4連勝で県リーグ昇格というシーズン当初に掲げた目標を見事に達成することが出来ました。
来年度は県3部リーグの上位に入れるように今後も活動を続け、頑張っていきたいと思います。

高58回　田中　洋平　（FCれいわ　主将）